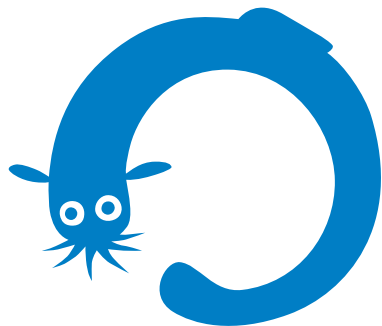


そうかわせみ、



そ
う
か
わ
せ
み、

Vol.9



一色真理

四月のえんどう豆 2



伊藤浩子

謝肉祭 4



相沢正一郎

シェイクスピアの台詞のある風景 6



岡島弘子

私は私をやめて 8

そうか! 10

四月のえんどう豆

四月には庭でえんどう豆が収穫できました。鞘を剥くと、中には小さなみどり色の時計。裏蓋を開けて螺子を巻いたのはいいのですが、それきり忘れていたため、昨日の夜、いきなり「さよなら」と鳴りだしたのには、びつくりしました。十二時の時報だったのですね。

悲しいことがあると手足や背中に苔が生える母の病気はその後いかがでしょう？ 思いがけず実家を離れて、今は坂ばかりが続く国に暮らしています。顔にはすっかりみどりの蔓が巻きつきました。朝にはいくつも水色の花が咲き、胸のあたりで重たいゼンマイが少しずつゆるんでいくのが分かります。母にはよく眠るよう、そして父の苔むした墓石の一文字として一生を終るのも、自分の選んだ精一杯の抵抗だったことを思い出させてあげてください。

もうすぐ夢も凍りつく冬が二つ目の太陽とともに河口から押し寄せてきます。ぼくが待ちに待った吊いの季節です。ここでぼくは父親が飼っていた黒い犬の精霊と出会い、新しい旅に出る予定です。えんどう豆の種子は一カ月ほど前に送りました。母ではなく、あなたが育ててください。鞘を剥いても、裏蓋は開けず、螺子も巻かないで、そのまま自分の口に放り込むのです。

あなたのお腹の中でそれはすくすくと育って、やがて水色の裏蓋を二本の足で蹴破るでしょう。そして十二時になると血まみれの喉で高らかに時報を告げるのです。ぼくがまだ若くて白い犬だったときに、あなたから思いがけず聞いたあのひとことを。

謝肉祭

花蕊までふるえる
森のかげに

失くした夜を
ゆびおり

——どこかに野井戸が口を開けているから
——道化と少女が耳を敬っているから

歩幅をそろえてはすべりおち
また 逃げまどう

胸の白さだけなら

ひきさいて

形代にさしだせたのに

はだしをとられた
薄いつきあかりと

いつまでも経っても
たどりつけない

シエイクスピアの台詞のある風景

○夜中に水道の蛇口からしたたり落ちる水音を聞いて、死者たちがやってくる。へたとえ武器は捨てても、水筒と飯盒と雑嚢だけは手放さなかった。水をください、水をください、水をください……。

翌朝、マーマレードの染みとパン屑のこぼれ落ちたテーブルクロスのうち、新聞の紙面から温かいコーヒーの香りにも薄まらない血と硝煙と蛆と膿と飢えが包帯のように滲みだしてくる。《この恐ろしい眠りに終わりはないのか?》

○洗面台のへりに片手をつき、蛇口をひねってお湯を出す。もう片方の手で曇った鏡をぬぐうと、《その顔皺だらけにして、目より松脂色の液体流し》。すこしまえまで、ふるえる手でカミソリをもってひげを剃っていたにきび面で《名前つてなに? バラと呼んでる花を》なんて、囁いていたのに……。

○わたしのものがたりはささやかだ——ベッドのしたのスリッパをかたつぽ発見したり、新し

いくつしたを履いたり、手紙の返事を書いたり、小包の紐の結び目が固くてなかなか解けなかったり、莢エンドウをひとやま新聞紙に包んだり、浴槽から溢れ出る水を見てあわてて蛇口をしめたり、自転車の鍵やホチキスや耳かきを探しまわったり、窓を開けて蜂を逃がしてやったついでに深呼吸をしたり……《あした、またあした、またあしたが小さな足取りで、いちにち、いちにちと書き留められた時の最後の一語まで、そつと過ぎてゆく》。浴室の電気を消し忘れないように。

○たつぷりのお湯に塩をひとつかみ。ほうれんそうの茎のほうからお鍋に入れ、シャキッと茹でる。じゅうぶんに絞る。瑞々しい緑を失わないように……。《名誉つてなんだ? ことばだ》

○ホルスタツフ、マクベス、リチャード三世……鏡の前で、とつかえひつかえ帽子を頭にのせるように、たくさんの顔をかぶってきたな。つめたいグラスがふれあうみたいなテーブルのうえの笑いのさざなみも消えて、道化師ヨリックのシャレコーベがあらわれる。《あの頭蓋骨にも舌があり、昔は歌をうたうことができたはずだ》。

○寝るまえにテーブルで日記をつける。《ことば、ことば、ことば》……東ねそこねた声をひろいあつめながら薄くなつて、一日のページのあいだに葉のようにはさみこまれる。

* 連作のうち。なお、訳は小田島雄志。

私は私をやめて

ゆるる裁ち台ごと生地をつかまえる

窓の外は牧場と羊の群れ

地平線のあたりは一本の菩提樹

ふるえる裁ち台 なみうつ生地を

なだめなだめ型紙をおく

窓の陽射しはみるみるかげる

雲がやってきて牧場の上に影をおとす

生地は中表にかさねる

内側は熱くなって息をひそめている

前身ごろ後ろ身ごろ となづけると ひくひくする

型紙より二センチぬいしろをおいて

裁ちバサミを持ちあげる

あばれる裁ち台はいつしゅん菩提樹をわすれる

けいれんする生地は羊をみていた目をとじる

地平線から雨がひろがってきて縦線となる 風景を消す

どしゃぶりになる 窓から雨滴がしみこむ

まぶたから涙がはみだす

裁ちバサミがうごいて羊を切り落とす

女体のラインに切り離されて

生地は生地をやめる ドレスの一部になる

そのとき

私から私が切り落とされる

私は私をやめて宇宙の一部になる

そうか！

避暑地の温泉から帰宅するため、ぼくと母は二つの箱を荷造りしていた。小さい箱は着替え類だが、大きい方は違う。そこにはまだ息をしそうな父が押し込まれていた。これを母は獲れたてのマグロだと言って、持ち帰ろうというのだ。小学生のぼくでもマグロが山に出ないことを知っているのに。それは海岸の砂の中を群をなして回遊し、耳の大きなゾウのような形をしている。でも、街の荒れ果てた一軒家にも出ることがある。床下は海とどこかでつながっていて、時おり変なもの流れ着くから。尋ねられたらそう言うんだよと、帰りのバスで母はぼくに念を押す。この箱の中に父はいないし、血も流れていない。あたしはおまえを守るために、襲いかかったマグロを殺つちまっただけなんだ。そうだね、おかあさん。でも、このマグロ息をしているよ。そうかい。来年の夏まであたしたちはまた休めないんだね。(一色)

(西からだって／朝日は 入った) こんな衝撃的な詩行に出会った。瀧葉子さんの詩集『遠い時間』の中の詩「陽光」の終連である。入院している(病室の西窓から／おおきな光りの束が躍り込んできた)というのである。瀧さんは歩けないらしい。高齢者らしい。これが最後の詩集になるだろう。と書いている。にもかかわらず朝の光りが花束のように西窓から瀧さんのもとに届いたのである。ミステリー小説のキャッチコピーのようなでも全体を読むと、そのからくりが解るようになっていく。病院の西の公園に一基のモニユメントがあつて、取り付けられた四枚の羽がぎらぎら照り返しながら回転していたのだそう。なるほどと思う。でもそうであつてもなくても、瀧さんの西窓は朝日に燃えたのだ。その意味を大切にしたい。奇跡は起きるのだ。けつして諦めてはいけないのだ。そう思う。(岡島)

三杯目の苔茶を飲んでるとき、ドアにノックがあつた。黙っているとドアはぎしぎしと、地軸を無理やりもう五度傾けたような音をたててこちら側に開いた。三人の女性が君を見つめて微笑んでいる。三人は間違いない君のための女性だ。君自身が認めようと認めまいとあまり関係ない。では君の何が三人に関係しているかというところ、それは血だ。君の体を今も流れている血だ。その血が君をここまで運んできたし、彼女たちをここに連れてきたのだ。三人は三人とも似たような恰好をしている。それは十八世紀末のフランス貴族を思い起こさせる。何とか伯爵夫人や何とか男爵夫人。革命前夜、斬首台の影におびえながら、夜な夜なパーティからパーティへ渡り歩き、庭の大本の陰で食るように繰り返したオーラル・セック、昨に不倫の悩みを打ち明けあつた日々。レーズがふんだんに使われたドレスを着、手(伊藤)

シェイクスピアの登場人物たちは、たとえどんな端役であつても、みんな生きていて、自分で喋っている。作者自身の考えやストーリーのために都合よく動かされている駒なんかじゃない。オフィーリアの父親ポローニアスは、ハムレットから見れば、俗物の老人だけど、子ども思いで、旅に出る息子に現実には即した知恵を与えたりしている。シェイクスピアは舞台からいなくなつていく。また、その反対にシェイクスピアの登場人物たちは、読者であるわたしたちが人生の航海で演じているたくさんの顔でもある。《金は借りてもいかにが貸してもいかに》と息子に忠告するポローニア、《悪逆非道な人殺しの恨みをはらしてくれ》とハムレットに頼む父の亡霊、《この危険には一刻も早く足枷をはめねばならぬ》と怒るハムレットの義父クローディアス。みんなひとりの父親。読者自身でもある。(相沢)

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、Vol.9 2013年6月21日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
